2．擦文期の北大構内遺跡群

北大文学部北方文化論講座　小野　裕子

北大構内遺跡群は，その大部分が続縄文後半期から擦文文化期のものである．これらのうち，平成元年度までに調査された遺跡群については，その時間的位置ならびに分布上の特色について，横山英介氏による報文（北海道大学埋蔵文化財調査室編　1989，p.19・同 1990，p.21-22）がある．小論では，その後を受けて，平成2年度から平成10年度の間に明らかにされた遺跡のうち，遺物が得られている平成7年度調査の薬学部校舎改修工事地点と地球環境研究科増設地点の資料を加え，改めて北大構内における擦文文化期の遺跡群について論じることにしたい．

Ⅰ　平成7年度資料の位置づけ

【薬学部校舎改修工事地点出土資料】同地点（fig.1-17）から得られた資料は土器片6点，礫3点と極めて僅かである．ここでは胴部細片を除き，内面に受部を持つ甕と内黒の坏について取り上げる．

［甕：本文39図3］口頸部にかけて数条の極浅い段状沈線が施され，内面に受部を持つ甕である．類例としてはユカンボシＥ4遺跡（北海道埋蔵文化財センター 1992）やサクシュコトニ川遺跡第2文化層（北海道大学埋蔵文化財調査室編　1986）の資料がある．後者の場合は，口唇並びに受部外端部に刻文が施されており，受部の貼付位置がかなり上部にくるため，上面観は二重口縁を呈するなど，特異な印象を与えるものである．頸部縮約部内面に受部を持つものとしては，南島松4遺跡Ｂ地点（松谷　1992）や丸子山遺跡（田村俊之編　1994）出土資料がある．

口縁部ないし頸部内壁に受部を持つ甕は，現時点では擦文文化期の千歳，恵庭，札幌という石狩低地帯においてのみ出土しており，それが付される甕は頸部に空白部を挟んで口縁部と肩部に数条の横走沈線文を持つ「寡条沈線分離型」か，口頸部に多条沈線を持つ「多条沈線型」であって，所謂刻文土器にはこうした事例は知られていない．従って，サクシュコトニ川遺跡出土資料は，こうした受部を持つ甕のほぼ下限を示すものと言えよう．

薬学部校舎改修地点出土の受部を持つ甕は，サクシュコトニ川出土資料より時間的に遡るのは勿論，浅く，広い間隔の段状沈線が施されるものであることから，ほぼ8世紀後葉頃に位置づけられよう．

［坏：本文39図2］ロクロ未使用の内黒坏で，内彎気味に開く小型のものである．このタイプの平底坏は，青森県や岩手県北部の8世紀後半代の遺跡に認められるもので，李平下安原遺跡（三宅他　1988）や虚空蔵遺跡（滝沢他　1978），二戸市中曽根Ⅱ遺跡（関　1981）などでは横走沈線文を持つ土師器との供伴例も知られている．薬学部校舎改修地点の坏は小型であることから，多少時間的に下がる8ｃ後葉頃に比定できる．

【地球環境研究科増設地点出土資料】

同地点（fig.1-16）からは100点余の土器片か得られており，器種は深鉢形の甕，球胴甕，坏である．遺物は旧建物跡に重なる北半部からの出土が多く，土器片のほとんどは小破片で接合度も低い．しかしながら，明治期のものと見られる若干の遺物を除くと，「北大Ⅰ・Ⅱ式」や「後北C_2・Ｄ式」土器は全く認められず，全体としては，擦文文化期としてのまとまりを持つものである．調査を担当されたシン技術コンサル（当時）の宮塚義人氏からも，これらの遺物群は基本的に *in situ* なものと考えて良いと伺っている．

［深鉢形の甕：38図1・2・5・7・8・9・10］口唇部断面が角形で外反するものが多く，軽い立ち上がりを示すものも若干含まれる．口唇部に刻みを持つものはない．いずれも小破片のため必ずしも全体の文様構成が明らかではないが，「寡条沈線分離型」と，肩部のみに沈線や段をもつ無文タイプとにほぼ2分でき，「多条沈線型」の甕は，初原的なものを除き含まれない．

この無文タイプの甕には，角形口唇で，口縁部を縦にハケメ調整した後，口縁部上端をヨコナデする特徴的な調整が見られる（本文38図2・4）．このような特徴を持つ甕は，札幌市Ｋ435遺跡（上野他　1993）の「Ⅱ群」にも認められる．

［球胴甕：図無し］胴部破片と，これとは別個体と見られる底部があり，いずれも球胴形と推定される．底部は縦のケズリにより厚さ1cmほどの円盤状に作り出されている．先の中曽根Ⅱ遺跡50号住居址やＫ435遺跡「Ⅱ群」の球胴甕が近い特徴を持つ．

［坏：図無し］主なものとして，口縁部破片3点が挙げられる．全て非ロクロ調整のもので，内面に黒色処理が施されている．うち2点は口縁部が外傾してほぼ平底に近くなるタイプと見られ，「国分寺下層式」の前半期に比定できる．

さて，以上の甕と坏からなる土器群は，全体としては札幌市Ｋ435遺跡の「Ⅱ群」土器に近い内容を持つ．同群は「8ｃ前葉」に位置づけられているが，11号竪穴のカマド火床からは，初原的な「多条沈線型」の甕が1点出

fig.1 北大構内の遺跡群

土しており，増設地点にも若干認められることから，これらの時間的位置は8c前半でもその後半部分，第2四半期に中心を置くものと思われる．

さて，同地点の資料には，これ以外に道外からの搬入を考えて良い資料が3点ある．

［坏・図37-2］器高3cmほどの浅い皿状タイプで沈線や段を持たないものである．体部外面はヨコミガキ，底部はハケメ後，ヨコ～ナナメのケズリに加え，ヘラによるナデツケが見られる．黒色処理は，内面から体部外面まで及ぶ．特徴的なのは，内面の底面円周沿いに指押さえによる凹みが巡ることで，器高の浅さと合わせ，八戸市丹後平古墳15号墳（工藤他　1990）出土の「BII類」タイプの坏や，下田町阿光坊遺跡遺構外出土の坏（下田町教育委員会　1990）を類例として挙げることができる．これらは体部外面にミガキ調整を施すことから，「国分寺下層式」前半の在地タイプとして理解されているものである．

丹後平古墳周辺の馬淵川流域の集落には「BII類」タイプの坏が殆ど認められない一方，15キロほど北の下田町阿光房遺跡には器形的にかなり近いタイプのものが存在する．増設地点出土の坏は，こうした地域からの搬入品である可能性を考えて良かろう．その時間的位置については，皿状で段を持たない点をやや時間的に遅れる要素とすると，ほぼ8世紀中葉頃に比定できる．

［球胴甕：図37-1］当資料は，①口縁は比較的短めの「くの字」状で，球胴ないし胴張り形である．②口唇部は薄手で丸くおさまる．③口縁部中程にヨコナデ調整に伴う筋が残る．④胴部は縦から斜めの軽いヘラケズリ仕上げ．⑤口縁部内面の調整はヨコナデ．⑥胴部内面の基本的な調整は横方向のハケメ．⑦細粒砂を含む胎土で焼成は良好だが，堅緻ではない．

今のところこのような特徴をもつ土師器甕は，道内には見あたらない．東北地方では球胴甕は，「塩釜式」から「国分寺下層式」にいたるまで認められるが，「栗囲式」以前の集落は岩手県南半部を大きく越えておらず，仮にこの時期の土器が道内へもたらされるとすると，東北北部にはその時期の在地の土師器はまだ存在していないことから，東北南部地域で製作されたものがストレートに入ることが考えられる．それ故，類例が東北南部の土器群に高い確率で認められると予想されるが，今熊野遺跡（丹羽　1985），宮前遺跡（丹羽　1983），大橋遺跡（太田1980），西大畑遺跡（島他　1981），善性遺跡（高橋　1982）などから出土している，「塩釜式」から「住社式」に至る球胴甕を実見比較した結果では，それらの胎土，焼成，器厚，口唇部形状，口縁部に見られる調整痕などの点で違いが大きく，当資料をそれらのうちに位置づけることは困難である．しかも，既述のように続縄文期に属する資料は全く含まれていないことから，この甕が「栗囲式」以前の土師器に該当する可能性は除外して良いと思われる．

そこで胴部外面の調整法にまず注目すると，ナデに近いような軽いケズリで，7c末から8c代の東北北部地域の甕に一般に見られるケズリ調整とは異なっている．これに近いと思われるケズリ調整が認められる遺跡としては，「国分寺下層式」段階の糠塚遺跡（宮城県教育委員会1978）や御駒堂遺跡「第4群土器」（宮城県教育委員会1982）を挙げることができる．甕類には「くの字」状口縁を持つ球胴甕も含まれるが，これらの器面調整は口縁部ヨコナデ，胴部縦のケズリ，口縁部内面はヨコナデ，胴部内面は横のハケメというのが大半である．この調整パタンは増設地点出土の甕に見られる器面調整と同様であり，しかも，胴部外面のケズリがナデに近いような「軽いケズリ」である点でも共通性を持つ．

次に，付随的な沈線様の調整痕が口縁部に残る点について検討してみよう．これとよく似た整形・調整法は，水沢市の熊之堂遺跡北地区のSD102溝跡（池田他1995）出土の甕に認められる．口縁部のこのような調整法は，北上川上流以北の東北北部において比較的多く認められ，北部的な特徴である．

しかしながら，北部地域である安比川流域から馬淵川流域における「国分寺下層式」段階の土器群は，口縁部が角形を呈するものが一般的であり，しかも既述のように器面調整において東北南部とは異なる地域的な独自性を示している．それ故，これらの地域からのダイレクトな搬入を考えることはできない．

つまり，これまでの検討から，当資料は，口唇部形状を含めた器形や全体的な器面調整においては東北南部のものに類似し，口縁部に見られる調整に東北北部的な手法が看取できるのである．そしてこの双方の特徴を共に土器製作の際に付与しうる地域としては，宮城県北部以北から北上川中流域にかけての地域が最もその蓋然性が高い．時間的には，宮城県北部の上記の2遺跡の資料から，「くの字」形口縁の胴張形の甕の普及が「国分寺下層式」の後半にあることが押さえられ，他方で北部的な影響を持つ甕が南部において製作される時期は，「国分寺下層式」の後葉を下限とすると見られることから，当資料は8c世紀後半代に位置づけられよう．

［紡錘車　本文図37-3］無文タイプの紡錘車が所謂刻文土器の盛行以前に多数を占め，その分布が石狩低地帯とその周辺部に限られることは既に指摘（中田　1989）

されているが，当資料のような断面が明瞭な台形で，厚みがあり，上下両面が平滑で，全体を丁寧なミガキ仕上げする紡錘車は，田面木平遺跡38号や50号住居址（藤田他　1988），櫛引遺跡第3号住居址（坂本他　1999），あるいは中曽根II遺跡145号住居址（前出）など，8c中葉を前後する時期の東北北部，殊に馬淵川水系周辺の遺跡のものに非常に近い．これに比して，道内のものは厚みが少なく，上底の軸孔周辺に凹凸を残すものが多数を占め，しかも全面をミガキ仕上げするものも少数であることなどから，当資料が東北北部からの搬入品である蓋然性は極めて高いと思われる．

既述のように，これら土器群の主要な部分はK 435遺跡C地点の「II群」に近いが，同群は竪穴住居址に伴うものである．一方，増設地点の土器群は，包含層の削平や攪乱を挙うじて免れた僅かな点数でありながら，深鉢形の甕，坏，球胴甕，紡錘車など多彩である．それが元の母集団を反映しているとして良いなら，同地点の土器群がK 435遺跡C地点同様，竪穴住居に伴うものである可能性は少なくない．増設地点は，サクシュコトニ川の古河道から直線距離にして東約110mの位置にある（fig.1参照）．この上流蛇行部の右岸側を見ると，遺物あるいは何らかの遺構の可能性を持つものが発見されている箇所は，情報教育センター西側地区（No.15）から上流側に2カ所あり，平均すると古河道から35mの位置にある．また，同センター西側地区の東30mに自転車置き場があるが（fig.1白星印），かつてこの設置に際して，竪穴住居址と見られる落ち込みが確認されている[1]．この位置は古河道から約65m東に当たる．これらはすべて古河道に沿って分布しており，殊に竪穴住居址と目される自転車置き場をこの蛇行部周辺の住居構築地点の一つのメルクマールとすると，増設地点周辺に住居址が存在したとすれば，調査区のさらに西を走る道路の東側沿い，つまり既存の地球環境研究科研究棟当たりになろう．

確かに，現時点まで増設地点周辺に竪穴住居址は確認されていない．しかしながら，得られている資料は，搬入品と見られるものは勿論，他の甕類なども道央的な変容は生じているものの「土師器」に分類されるものである．これらには在地の「十勝茂寄式」土器群や，それとの融合化を示す資料が全く含まれないことから，「土師器」を伴うグループによってこの場所に残されたものであり，それらは居住に伴う生活廃棄物であった蓋然性が高い．時間的には，既に論じたところから，8c第2四半期から第3四半期にかけての時期となろう．

II　擦文期の北大構内遺跡群

擦文文化が，続縄文系グループの土師器文化による変容であることは既に周知のことだが，その変容過程は，続縄文系グループと土師器を伴うグループとの併存・接触段階と，融合完了段階に分けられる．これについては既に横山氏の論考があるが（横山　1984），北大構内の擦文期の遺跡群についてはこうした理解が生かされておらず，異なった整理の仕方が必要である．ここでは前章の結果を含め，改めて北大構内の擦文期の遺跡群の位置づけを行いたい．

【併存・接触段階－A．在地グループ】

「十勝茂寄式」（大沼　1989）の甕に土師器坏という組み合わせの成立を，擦文文化への第一歩とすることは今日異論がない．構内におけるこの段階の遺跡は薬学部受水槽予定地（fig.1-10）と国際学術交流会館遺跡（fig.1-9）である．

薬学部受水槽予定地では「十勝茂寄式」の甕と体部下半に沈線を1条持つ椀形平底坏，およびやや間隔をおいた数条の段状沈線や沈線文を持つ甕が一括と見なされる状態で出土している（北海道大学埋蔵文化財調査室編1985）．このような鋸歯文や烈点文を持つ「十勝茂寄式」土器群と「多条沈線型」の土器群との時間的併行関係から，両者が融合した刻文土器が成立することは既に指摘されている（横山前出）．

この受水槽予定地から得られている椀形平底坏は，K 435遺跡の「II群」よりやや新しい特徴を備えているが，「III群」では既に定型的な深めの椀形平底坏に移行していることから，「II群」と「III群」の間に位置づけられる．報告では「III群」は，「II群」に続く「8c中葉～後葉」とされているが，「III群」には平行叩き目の須恵器甕と回転ヘラ切りおよび回転糸切りの須恵器坏が伴うことから，同III群はむしろ8c後葉に中心を置くと思われる．それ故，受水槽予定地資料は8c第3四半期頃に比定できる．

学術交流会館からは性格不明の小竪穴が2基検出されており（北海道大学埋蔵文化財調査室編　1987），1軒の竪穴埋土から「十勝最寄式」土器片が得られている．時間的には，受水槽予定地に併行するか，乃至は多少遡る可能性がある．さらに上流の扇状地末端面に位置するK 135遺跡西4丁目地点（上野他　1987）最上層もほぼ同時期の遺跡であるが，周辺での雑穀栽培が推定されているものの，竪穴住居址は未検出である．

このように「十勝茂寄式」段階の遺跡はサクシュコトニ川上流部に散点的に認められるのみであり，そこでは竪穴住居を伴う形での定着が確認されていない．

この段階では，彼らは土師器を伴うグループと併存・接触しつつも，依然として上流部側の扇状地末端面周辺において，続縄文的な社会・経済システムを維持していたものと思われる．

【併存・接触段階－B．土師器を伴うグループ】

8c第2四半期には先の増設地点周辺に土師器を伴うグループの，恐らく竪穴住居を伴う進出が始まる．下流部のサークル会館遺跡（fig.1-13）は，竪穴住居に共伴する資料が極僅かだが，埋土の資料も含めると（北海道大学埋蔵文化財調査室編 1981），K 435 遺跡「II群」から「III群」にかけての時間的位置を持つ．このことから，土師器を伴うグループが上流蛇行部の増設地点に進出してまもなく，下流部のサークル会館遺跡においても居住が開始されていたことが窺える．同遺跡の北にある陸上競技場では，平成6年度の立会調査で竪穴住居が確認されており（北海道大学埋蔵文化財調査室編 1995），出土した坏から見てこれらの遺跡とほぼ同時期の住居の可能性がある．また，工学部裏でも土師器を伴う竪穴住居址が検出されており（後藤　1937，上野　1979），サクシュコトニ川左岸沿いの農場内にも同グループの住居址の存在が知られる．上流部では，中央道路共同溝（第4工区）（fig. 1-1）青粘土層から土師器甕が出土しており（北海道大学埋蔵文化財調査室編　1995），この周辺にも住居址が存在する可能性がある．これら土師器を伴うグループは，上述のように受水槽予定地や学術交流会館遺跡などの「十勝茂寄式」グループと時間的に併行し，接触が開始されるが，上記のグループと同様，相互的な影響が依然限定的な範囲に止まっている段階である．

【融合開始段階】

併存段階から進んで，両グループが擦文文化へ歩み出した段階が，教育学部北広場遺跡（fig.1-18），薬学部校舎改修工事地点（fig.1-17），薬学部周辺整備工事地点（fig. 1-20）などである．

教育学部北広場遺跡では2軒の竪穴住居址が調査されているが（北海道大学埋蔵文化財調査室編　1983），1号竪穴埋土や3号住居出土の甕は「十勝茂寄式」に由来する特徴を持つことから，融合化に踏み出した段階であることが捉えられる．これら住居群から得られた資料は，サクシュコトニ川第2文化層の前半部に比定できる．同様の段階は，薬学部周辺整備工事地点から得られている甕にも認められる（北海道大学埋蔵文化財調査室編 1990）．前章で検討した薬学部校舎改修工事地点の甕もその特徴から融合段階初期に含められるが，上の2例より多少時間的に遡り，受水槽遺跡にやや遅れる時間的位置が与えられる．

【融合完了段階以降】

この段階の好例はサクシュコトニ川遺跡（fig.1-6）第2文化層後半である．原初的な農耕を組み入れた複合的な生業体系を基盤とする本格的な擦文文化の確立が明らかになっている（北大埋蔵文化財調査室編 1986）．同段階としては，先の教育学部北広場遺跡遺構外出土の甕や，あるいは職員福利厚生施設出土資料（fig.1-11）も含められよう．

これに続く段階は工学部核磁気共鳴装置棟敷地内遺跡（fig.1-19）で，サクシュコトニ川遺跡の第1文化層併行である（北海道大学埋蔵文化財調査室編　1988）．

さらに後れる段階は，先の薬学部周辺整備工事地点の新しい時期の土器群や，応用電気研究所前遺跡（fig.1-23）の竪穴住居址埋土資料（北海道大学埋蔵文化財調査室編 1981）が該当する．竪穴住居址は未検出だが，下流部のK 39 遺跡北18条道路地点ではこの段階の住居群も検出されているので（藤井　1998），上流部のこれらの資料も竪穴住居に伴う可能性が高い．fig.2 はこれらの遺跡群の関係概念図である．

以上のように，北大構内遺跡群においては，社会・経済システムの完全な脱続縄文化を完了した段階は，その遺跡立地，生業内容，刻文土器の成立などから，サクシュコトニ川遺跡第2文化層や教育学部北広場遺跡に求められる．これ以降は土師器系のグループと在地グループとは完全に同化して，まさに擦文集団としてのグループのみが存在することになる．刻文土器の成立はこうした集団的な統合化のプロセスを雄弁に物語るものである．

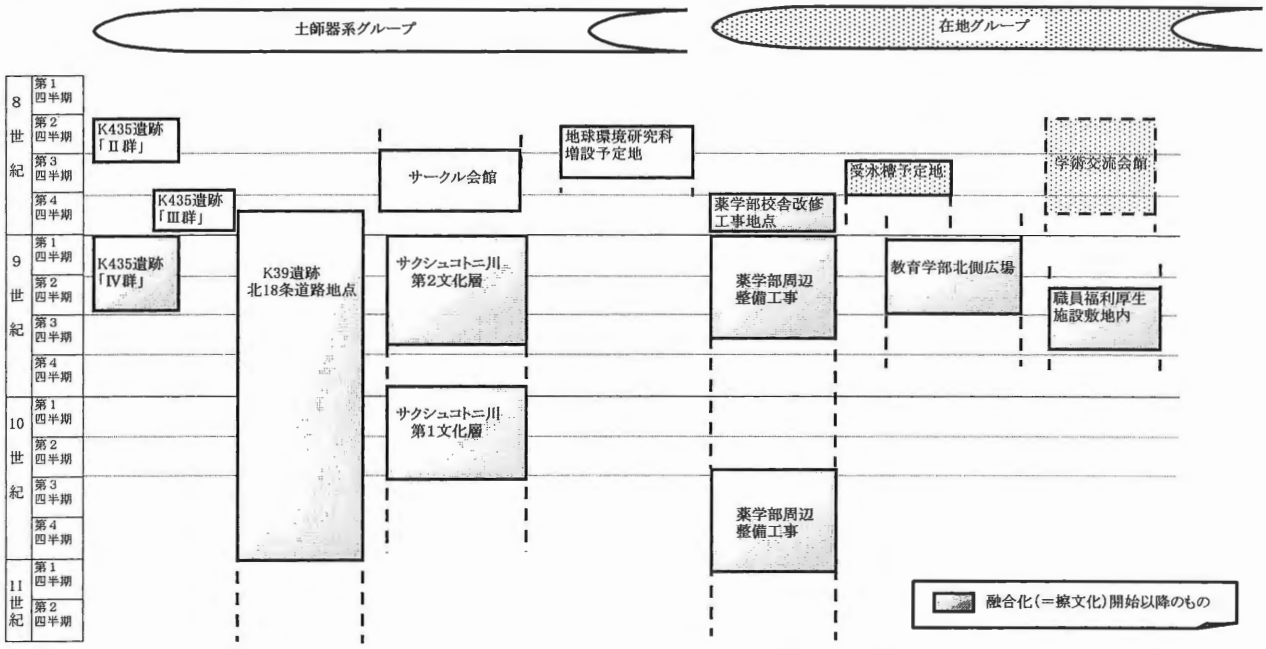
本稿は依頼者側のご都合により，当初予定した論文の部分的な要約に止まった．論文の作成に当たっては資料の実見などで多くの方々にお世話になっている．機会を改めて責めを果すことにしたい．

以下の方々に深謝申し上げる．恵庭市教育委員会上屋真一氏，松谷純一氏，札幌市教育委員会仙庭伸久氏，八戸市教育委員会宇部則保氏，東北歴史資料館阿部博志氏，岩手県埋蔵文化財センター高橋与右衛門氏，岩手県立博物館女鹿淳哉氏，水沢市埋蔵文化財センター伊藤博幸氏，佐藤良和氏，青森県埋蔵文化財センター相馬信吉氏，アジア航測宮塚義人氏御夫妻．

註

1）この落ち込みが竪穴住居址であることについては，工事に立ち会われた当時の文学部附属北方文化研究施設の大井晴男・天野哲也両先生からそれぞれ御教示を頂戴した．感謝の意を表したい．

fig.2 擦文期の構内遺跡群の関係概念図



引用・参考文献

藤井誠二
1998「札幌市K 39 遺跡北 18 条道路地点」『1998 年度遺跡調査報告会資料集』北海道考古学会 pp 26-31

藤田亮一・宇部則保
1988『八戸市新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書V－田面木平遺跡(1)』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 20 集

後藤壽一
1937「札幌市及其附近の遺跡・遺物の二三に就て」『考古学雑誌』pp. 585-619

北海道大学埋蔵文化財調査室編
1981『北大構内の遺跡 昭和 55 年度』[1]
1983『北大構内の遺跡 昭和 56 年度』[2]
1985『北大構内の遺跡 昭和 58 年度』[4]
1986『サクシュコトニ川遺跡—北海道大学構内で発掘された西暦 9 世紀代の原初的農耕集落—』
1987『北大構内の遺跡 昭和 59 年度』[5]
1988『北大構内の遺跡 昭和 60－61 年度』[6]
1989『北大構内の遺跡』昭和 62 年度・63 年度 [7]
1990『北大構内の遺跡』昭和 64 年度・平成元年度 [8]
1995『北大構内の遺跡 平成 3・4・5・6 年度』[10]

北海道埋蔵文化財センター
1992『恵庭市ユカンボシE 4 遺跡—般国道恵庭バイパス建設工事及びユカンボシ川小規模改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—』北埋調報 75

池田明朗・佐々木千鶴子他
1995『水沢遺跡群範囲確認調査熊之堂・跡呂井館・中平館・梨畑・二ツ渕遺跡 平成 6 年度発掘調査概報』岩手県水沢市文化財調査報告書第 29 集

工藤竹久・藤田亮一他
1990『丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 4 集

松谷純一
1992『中島松 1 遺跡 南島松 4 遺跡 南島松 3 遺跡 南島松 2 遺跡』恵庭市教育委員会

宮城県教育委員会
1978『宮城県文化財発掘調査略報 (昭和 52 年度分)』宮城県文化財調査報告書第 53 集
1982『東北自動車道遺跡調査報告書』VI 宮城県文化財調査報告書第 83 集

三宅徹・坂本洋一
1988『李平下安原遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 111 集

中田裕香
1989「擦文時代の紡錘車について」『古代文化』Vol.41 pp 307-324

丹羽 茂
1983『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第 96 集
1985『今熊野遺跡・一本杉・馬越遺跡』宮城県文化財調査報告書第 104 集

大沼忠春
1989「北海道の文化」『古代史復元』9 講談社 pp 174-187

太田昭夫
1980『大橋遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第 71 集

坂本真弓他編
1999『櫛引遺跡—東北縦貫自動車道八戸線 (八戸～八戸) 建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—』青森県埋蔵文化財調査報告書第 263 集

島隆・相原康二他
1981『東北自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 IX (水沢地区)』岩手県文化財調査報告書第 60 集

下田町教育委員会編
1990『阿光房遺跡発掘調査報告書』下田町埋蔵文化財調査報告書第 2 集

高橋与右衛門編
1982『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書 水沢市膳性遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第 34 集

滝沢幸長・工藤竹久
1978『虚空蔵遺跡発掘調査報告書』名川町教育委員会

田村俊之編
1994『丸子山遺跡における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書 IX

関 豊
1981『仲曾根II遺跡発掘調査報告書』二戸市教育委員会

上野秀一
1979『K 446 遺跡』札幌市文化財調査報告書 XX

上野秀一・加藤邦夫
1987『K 135 遺跡 4 丁目地点 5 丁目地点』札幌市文化財調査報告書 XXX

上野秀一・仙庭伸久
1993『K 435 遺跡』札幌市文化財報告書 XL II

横山英介
1984「北海道におけるロクロ使用以前の土師器—擦文時代前期の設定—」『考古学雑誌』第 70 巻第 1 号 pp 52－75